

INTERNATIONAL SYMPOSIUM

“UNSHAREABLE PEACE(S) / CONFLICTS IN MOTION”

日時：2019年11月9日（土）

10:30～（開場10:00）

会場：立命館大学・衣笠キャンパス

創思館1階カンファレンス ルーム

日本研究で著明な孫歌さん（立命館大学先端総合学術研究科で11月初めに大学院集中講義あり）とBRETT DE BARRYさん、さらに映像インスタレーション「日本人を演じる」で2017年日産アートアワードグランプリを受賞し、あいちトリエンナーレ2019での最新作「無情」も注目されているアーティスト藤井光さんをお招きし、さらにさらに次代を担う新進の研究者の発表やコメントまでであるという盛りだくさんなシンポジウムです。

プログラム 開場 10:00-

第1部

- 10:30- **番匠健一**（同志社大学＜奄美・沖縄・琉球＞研究センター嘱託研究員）
「入植と離散と文学サークル運動——境界地域としての北海道東部」
- 11:00- **近藤有希子**（日本福祉大学国際福祉開発学部）
「沈黙する発話、情動する身体——ルワンダに生き残る暴力の記憶と痛みへの想像力——」
- 11:30- **小山仁美**（立命館大学グローバル教養学部）
「傷とキズナと国家と：宙づり主体の戦後について」
- 12:00- コメント
（**天野尚樹**（山形大学人文社会学部））・質疑応答
- 12:30-1:20 ランチ・討論（創思館3階303・304）

第2部

- 1:50- **藤井光**
「『無情』一戦時下における国策宣伝映画『国民道場』を再演する——
（『無情』（2019）のシングルチャンネル版（23分）上映）」
- 3:10- **ブレット・ド・バリー**（コーネル大学）
「多和田葉子と方法としての翻訳：脱構築と「ポスト人種」の問い」
- 3:40- **孫歌**（中国社会科学院）
「移動している辺境」
- 4:20- コメント
（**原佑介**（立命館大学先端総合学術研究科授業担当講師））・全体討論
- 6:00- 情報交換会
- 参加される方は事前下記メールアドレスにお名前と人数をご一報ください。
 - 情報アクセス保障（PCテイク、手話通訳など）については、10月25日までに下記までご連絡ください。
 - 参加にあたり託児所のご利用を希望される方は、10月25日までに、下記までご連絡ください。
 - イベントに関連して、立命館大学大学院先端総合学術研究科集中講義「特殊講義Ⅰ(C)」が、11月7・9・11・12・13日に創思館401・402で行われます。聴講される方はお問い合わせ下さい。

【連絡先】

立命館大学先端総合学術研究科「共有できない平和／争いが移動する」窓口
sentan01@st.ritsumei.ac.jp

主催：同シンポジウム実行委員会

共催：立命館大学先端総合学術研究科

後援：立命館大学生存学研究所

国際シンポジウム
共有できない平和／争いが移動する

「共有できない平和／争いが移動する」(“Unshareable Peace(s) / Conflicts in Motion”) という問題設定

美馬達哉
(立命館大学)

このシンポジウム企画は、孫歌氏を立命館大学先端総合学術研究科に2019年度に招聘して集中講義を行っていただいたことに由来する。講義内容は、「昭和史論争」を題材に「日本戦後思想論争のテキストを読むことによって、歴史における人間という問題を理解すること」(シラバスより)を目標とするものだった。

歴史における人間という問い、すなわち歴史・社会的プロセスと生きられた経験をつなぐことへの挑戦は、人文社会学の根本問題の一つである。

それを可能とするには、大文字の歴史や社会から説き起こすのではなく、現実の最小の細胞を凝視し、散乱した断片にこだわり、拡大鏡を使って正統性や総体性に潜む小さな傷を見いだすことから出発するやり方が必要だと考え、私たちはこのシンポジウムを企画した。そして、話題提供をしていただく方々は、意図的に重なり合わない分野を選び、思想史、文学研究、人類学、政治学などに加えて、アート領域も含めた。異分野での格闘と化学反応によって新しく生き生きとした知を生み出すのは、生存学研究所にふさわしいやり方だと思う。

最初に登壇して、開拓、アジア太平洋戦争、移民、北方領土などを有機的に結合させつつ、北海道東部の現代史から山田洋次まで幅広く論じてくれた番匠健一氏は生存学研究所の客員研究員である。

さて、このシンポジウムのテーマの一つは「平和」であった。しかし、そこに込められていたのは、戦争と平和という二分法の意味での平和ではない何かを扱うことで「歴史における人間」をあぶり出せないかという直感であった。

平和は一つではない。戦争、とりわけ総力戦、の傷跡は戦争それ自身よりはるかに長生きで、人間の心であれ、社会体制であれ、建築や事物であれ、平和な日常のなかにしばしば現前し、あるいは「平和」を切り裂く。たとえ集合的忘却を強いられたとしても、個人の経験の次元での傷はつねに苦痛と結びついているため、完全に沈黙させられることはない。だが、同時に完全に伝達可能になるわけでもない。

二番手の登壇者である近藤友希子氏は、ルワンダでの虐殺の正統的な継承の語りからは抜け落ち、平和を作り出すためには触れてはならない記憶＝忘却について、フィールドワークをもとに報告してくれた。

平和のなかに残存する苦しみの痕跡と記憶と言語の絡まりあった関係は、学問や知の対象となり得るだろうか。さらにいえば、消毒された形で、たんなる知の対象として扱うことは許されるのだろうか。

私があなただの痛みを経験することはできない以上、「苦痛が生み出すものは何であれ、苦痛の共有不可能性(unsharability)にその一部を負っており、その共有不可能性は、苦痛が言語に抵抗することに由来する」からだ(Elaine Scarry (1985) “The Body in Pain”).

苦痛が言語に抵抗するとき、言語もまた苦痛に抵抗する。なぜなら、苦痛は共有不可能性の中で自足するのではなく、共有の切断を逆説的に共有しつつ、つねに他者と他者の応答責任へと向けられているからだ。その結果、ときに共有不可能性は、伝達言語とは別のメディア(媒体)を通じて表象される。

アーティストの藤井光氏の作品と発表はまさに、言語や学問とは異なったやり方で、植民地の経験を通じての主体の構築に光をあてるものだった。アートと政治に関しては、今回の企画の準備中に、藤井氏も出展していた「あいちトリエンナーレ2019」が問題化した。こうしたハブニングは、アートがもつ社会的潜勢力を示しているとも言えるだろう。

ブレット・ド・バリー氏が論じた多和田葉子は、翻訳と移動の技法によって、見慣れた言語を見知らぬ何かへ変容させるような作家だ。そうして描き出された伝達言語の臨界点には、苦しみや傷跡だけではなく、解放のよろこびもまた存在していることを忘れないようにしよう。

私たちは戦争の傷の共有不可能性がさまざまな争いを生み出す事態を目撃しつつある。そこでは、生きられた経験、歴史社会的な集合的記憶と忘却、それらの文化的表象、法による制度的対応が重層的に絡まり合い、問題

を込み入ったものとしている。この傷の複合が争いへと上昇するとき、しばしばそれらはずらされて、紋切り型で排他的に構築された共有不可能性——「民族」、「国益」、「移民」など——へと節合される。

小山仁美氏は、「被害者」アイデンティティが戦争の記憶のなかでどのように変奏されているかに着目して、戦後日本のナショナリズムを分析してくれた（この特集には収録されていない）。

傷の複数性と転移する争点が状況を見通すことを困難にしている中、友敵の二分法という共有不可能性に抗して未来を構想するため、国境の壁も学問の壁も越えた討論をするという企画者の意図が多少なりとも成功したとすれば、孫歌氏のおかげだろう。

「一目で三国を眺める」国境の町を見て歩くユーモアに溢れた旅行記の体裁で、地にしっかりと足の着いた知とはどういうものかを見事に提示してくれた。

こうした異分野融合型のシンポジウムにおいて、もっとも難しい役割はコメンテータである。その役割を引き受けていただき、鋭い質問を投げかけてくれた天野尚樹氏と原祐介氏には心から感謝したい。

最後に、この企画の真の仕掛人は平田由美氏であることを暴露しておこう。平田氏と伊豫谷登志翁氏の長年にわたる日本研究とグローバリゼーションと移動と文学をめぐる研究プロジェクトに、私も中途から参加している。孫歌氏もしばしば参加されていたその研究会は銀閣寺そばの西川祐子氏の自宅の書庫で開かれることが多かった。その成果の一端は、当時平凡社におられた編集者の関正則氏の尽力により、2014年に論集『「帰郷」の物語／「移動」の語り：戦後日本におけるポストコロニアルの想像力』（平凡社）として出版されている。

その一種の「同窓会」をしようというアイデアが元になって本企画は生まれた。

